

答申文化財の概要

●^{のうがくおおつづみ}能楽大鼓^{かわ}(革)製作 ^{きむら やすし}木村 泰史 昭和36年生 奈良市

能楽大鼓は、笛、小鼓、太鼓とともに能楽の囃子^{はやし}を構成する楽器の1つである。能楽大鼓の革は、馬皮を鉄製の輪に張って縫い留めたもので、製作には、原皮の質を見極め、革の張り加減を調整する熟練した技術が求められる。

木村家の革は、「奈良革^{ならかわ}」と呼ばれ、能楽堂での演奏に適した、柔らかく深みのある音色に定評があり、長年にわたり数多くの能楽実演家の舞台を支えてきた。

木村泰史^{きむら やすし}氏は、祖父の代から能楽大鼓の革製作を家業とする木村家の次男として生まれ、幼い頃から父・木村幸彦^{きむら ゆきひこ}の仕事を見て育った。平成13年頃から本格的に父の下で修業を開始し、2年ほど兼業しながら技術を習得した後、革製作に専念するようになった。

「能楽大鼓(革)製作」は、昭和51年5月4日に選定保存技術に選定されたが、令和4年10月22日、保持者である木村幸彦^{きむら ゆきひこ}氏の逝去により選定が解除された。今回、改めて選定するとともに、木村泰史^{きむら やすし}氏をその保持者として認定するものである。



木村 泰史 氏



製作中の木村氏

提供：文化庁